

牧野 カツコ

(お茶の水女子大)

〔目的〕 アメリカの家庭科教科書は、教科書検定制度がないことから、個性的な体裁や内容のものが多し。版を重ね、内容を改訂してきているものも多しので、今日まで、どのような変遷をたどって来ているのか、全領域をカバーしている教科書をできるだけ多くとりあげ、その内容と構成の特徴および変化の動向を明らかにする。

〔方法〕 アメリカ合衆国で出版された家庭科教科書のうち、衣食住およびその他の領域を扱っているもので、入手または閲覧できた1940年から97年までの36冊を対象として、タイトル、改訂の状況、内容(領域、章立て)とその割合、構成などを分析した。

〔結果〕 (1) タイトルに用いられる用語として、HOME(家庭)は1950年代ごろまで、比較的多く用いられてきたが90年代には全く見られなくなった。LIVING(生活/暮らし)は50年代から90年代まで一貫して多く用いられている。最近ではLIFE(生活/人生)がやや多くなっている。(2) 自分自身を理解する内容の学習が、40年代から一貫してどの教科書でも最初におかれている。(3) 被服、食物の内容は60年代までは、合わせて全体の70%以上を占めるものが多かったが、70年代から減少が著しく、最近では30%程度となっている。(4) どの年代でも、内容(章立て)に個性のあるものがあり、全領域を扱いながら、自分自身と人間関係、Management(自己管理)、Family(家族)、Communityなど、ある視点を強調する編集がみられた。(5) 70年代以降、ほとんどの教科書で、CAREER(職業)に関連する内容を、章または節で取り上げている。(6) FAMILY(家族)の扱いは全体として少なく、最近では家族の定義を一つだけ出すことをしない傾向になっている。